

高
町
道
跡

姫路市

高町遺跡

— 二級河川恒屋川河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —



平成 25(2013)年 3月

兵庫県教育委員会

兵庫県教育委員会

兵庫県文化財調査報告書

第444冊

姫路市

高町遺跡

— 二級河川恒屋川河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成 25(2013)年 3月

兵庫県教育委員会

例　言

1. 本書は姫路市香寺町広瀬字高町に所在する高町遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、兵庫県中播磨県民局姫路土木事務所が計画・施工する（二）恒屋川　河川激甚災害対策特別緊急事業に伴うものである。
3. 確認調査は平成3・6年度に3回にわたって実施し、一部全面調査を平成6年度に行った。すべて兵庫県教育委員会が調査主体となり、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が調査担当した。
4. 調査は平成3年度は吉識雅仁・水口富夫・長濱誠司が、平成6年度は渡辺　昇・所崎明雄が担当した。
5. 調査で使用した方位は国土座標第V系を使用し、水準は兵庫県設定の2級基準点ならびに3級基準点を使用した。
6. 調査段階では岩部遺跡として調査したが、その後の周辺の調査結果によって遺跡名が香寺町教育委員会によって細分され変更されたので、その呼称に合わせて高町遺跡とした。
7. 遺物出土状況や土層断面図ならびに遺構写真は調査員が行った。
8. 写真図版2の空中写真は国土地理院撮影のものを使用した。
9. 整理作業は、平成24年度に兵庫県教育委員会を調査主体として、公益財團法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部が実施した。
10. 執筆・編集は栗山美奈の協力を得て渡辺が行った。
11. 本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。ご活用ください。
12. 発掘調査・整理調査にあたって、地元関係者をはじめ多くの方々・機関のご協力・ご教示を得ました。感謝致します。（敬称略・順不同）
松本正信・加藤史郎・秋枝　芳・義則敏彦・大谷輝彦・小柴治子・中川　猛・福井　優
・堀本裕二・姫路市教育委員会・（旧）香寺町教育委員会



第1図 高町遺跡（姫路市）の位置

本文目次

例言

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯と既往の調査 1

第2節 第3次確認調査の経過 1

第3節 整理作業の経過 2

第2章 位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境 3

第2節 歴史的環境 3

第3章 調査結果

第1節 室町時代の遺構と遺物 9

第2節 平安時代後期～鎌倉時代の遺構と遺物 9

第3節 古墳時代後期の遺構と遺物 10

第4節 包含層の遺物 11

第4章 おわりに 16

挿図目次

第1図 高町遺跡（姫路市）の位置

第2図 調査風景 1

第3図 調査風景 2

第4図 整理作業風景 2

第5図 高町遺跡周辺の地形 4

第6図 周辺の遺跡 6

第7図 高町遺跡の位置と周辺の遺跡 7

第8図 調査風景 16

表目次

第1表 高町遺跡出土遺物観察表 14・15

図版目次

図版1	調査位置図	図版5	遺物1
図版2	確認調査土層図	図版6	遺物2
図版3	調査区平面図	図版7	遺物3
図版4	遺構図		

写真図版目次

写真図版1	遺跡遠景（東から）	写真図版9	遺物1
	遺跡遠景（南から）	写真図版10	遺物2
写真図版2	空中写真	写真図版11	遺物3
写真図版3	調査地遠景	写真図版12	遺物4
	2 トレンチ西壁	写真図版13	遺物5
	3 トレンチ西壁	写真図版14	遺物6
	3 トレンチ西壁	写真図版15	遺物7
	4 トレンチ西壁		
写真図版4	6 トレンチ西壁		
	7 トレンチ東壁		
	8 トレンチ北壁		
	8 トレンチ東壁（SK02断面）		
	7 トレンチ扯張全景検出状況（北から）		
写真図版5	7 トレンチ全景（北から）		
	調査区全景（北から）		
写真図版6	SK03断面		
	SK03出土状態（東から）		
	SK03全景（北から）		
	SK04断面		
	SK04全景（北から）		
	SD03堆積状況（東から）		
	SD03全景（東から）		
写真図版7	SX01（東から）		
	SB02（東から）		
写真図版8	SB02（北から）		
	P6断5割り（北から）		
	P7断5割り（北から）		
	P8断5割り（北から）		
	P10断5割り（北から）		

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

高町遺跡は兵庫県姫路市（調査時は神崎郡香寺町）広瀬に所在する遺跡である。恒屋川は市川支流の小河川である。當時は静かな流れを示しているが蛇行が激しいこともあって、台風などの大雨時には広瀬・土師地区では氾濫することが繰り返された。その解消手段の1つとして兵庫県姫路土木事務所によって河川整備事業特別緊急事業として河川改修が計画された。事業地周辺では県営は場整備事業も計画され、順次実施されていた。事業地全域を対象として、松本正信・加藤史郎・中浜久喜各氏によって分布調査が実施され、400ヶ所以上の埋蔵文化財が包蔵する水田が確認された。その多くは岩部遺跡として埋蔵文化財包蔵地に登録されている。開発に際して、県営は場整備事業地は香寺町教育委員会、河川改修事業地は兵庫県教育委員会が担当して確認調査を実施することとなった。

計画に伴って姫路土木事務所から調査依頼があり、平成元年度に確認調査を実施した。調査は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所企調査第2課、水口富夫・長演誠司が担当した。平成3年11月11日～13日の3日間を費やし、坪14カ所・53m²の確認調査を行った。そのうちの12・13Gで遺構と包含層が検出されたことから、12・13Gを中心として遺構の広がりが想定された。しかし、明瞭な遺構が検出されないことから、即全面調査に移行することは疑問が残った。12G周辺にトレンチ2ヶ所を設定する第2次確認調査を行った。調査は平成4年3月25日に調査第2課吉識雅仁・長演誠司が担当した。遺物は出土するものの、明確な遺構が検出されなかった。



第2図 調査風景

第2節 第3次確認調査の経過

平成5年度に本發掘調査を実施した。平成元年度の確認調査では明確に調査範囲を確定することが出来なかった。そのことから、確認調査は坪堀調査でなく、調査面積を広げたトレンチ調査に変更した。その結果7・8トレンチを中心に遺構が確認され全面調査の必要が生じた。調査面積の規模が小さく、工事を急ぐ必要があることから、確認調査に統いて全面調査も行った。2月前に起きた未曽有の震災によって、次年度以降は調査件数が増大することが懸念されたことも早期に調査を実施した理由である。兵庫県姫路土木事務所（龍野土木事務所）の直接執行として調査を実施した。調査は姫路土木事務所からの依頼で調査員を派遣して実施した。平成6年3月22日から30日までの実働8日間を費やした。調査は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所担当者が行った。

調査事務 兵庫県教育委員会
 埋蔵文化財調査事務所
 所長 池水義輝
 企画調整班 調査専門員 山本三郎
 主査 水口富夫
 調査第3班 調査専門員 吉田 昇
 調査担当 調査第3班 渡辺 昇・所崎明雄
 作業員 香寺町広瀬・岩部の方々



第3図 調査風景

第3節 整理作業の経過

整理作業は平成24年度に単年度事業として、兵庫県中播磨県民局姫路土木事務所と兵庫県教育委員会とで委託契約を交わした。姫路土木事務所の依頼に基づき兵庫県教育委員会を調査主体とし、公益財團法人兵庫県まちづくり技術センターを調査機関として実施した。水洗い作業から報告書刊行までの作業を公益財團法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部で行った。

調査主体 兵庫県教育委員会
 調査事務 (公財)兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
 部長 高尾尚登
 次長 深井明比古
 整理保存課 課長 村上賢治
 副課長 鎌宮 正・深江英憲
 調査担当 副課長 渡辺 昇
 嘱託員 栗山美奈・八木和子・吉田優子・鳥村順子・荻野麻衣
 保存処理 副課長 岡本一秀
 嘱託員 浜脇多規子・桂 昭子



第4図 整理作業風景

第2章 位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

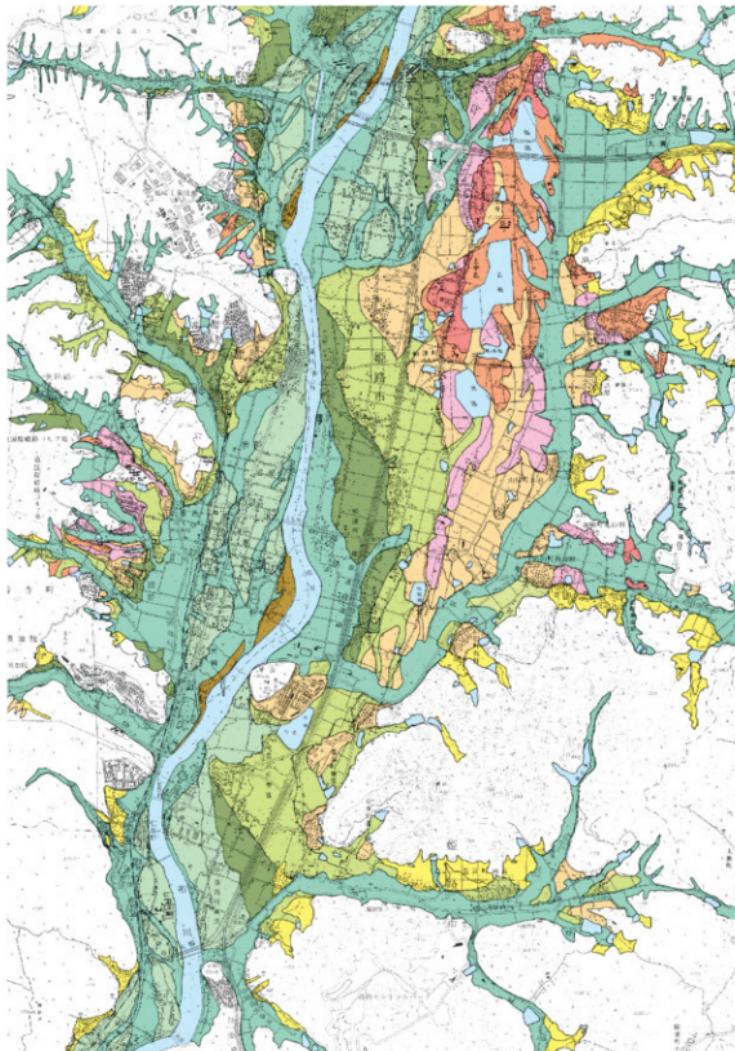
高町遺跡は兵庫県姫路市香寺町広瀬に所在する。平成18年3月の合併で姫路市になったが、調査段階は神前郡香寺町であった。市川は但馬何部の生野に源を発し、神河町・市川町・福崎町を経て姫路市に流れ、播磨灘に注ぐ兵庫県を代表する河川である。市川町・福崎町で平野部を形成するが狭隘な部分によって隔離されている。特に姫路市砥堀では狭くなり、神崎郡と飾磨郡の郡界となっている。香寺町は神崎郡南部の市川中流域にあり、北緯34度54分57秒、東經134度44分36秒に存在する。高町遺跡東側に市川本流が南下し、恒屋川が西側を流れ、両河川に挟まれた微高地上に立地している。市川は遺跡南東部で屈曲し南東方向に蛇行しており、微高地が伸びていることが窺い知れる。恒屋川は直線的に流れ、条里地割に即しているように思われる。

第2節 歴史的環境

旧石器の遺跡は余り知られていない。表面採集がほとんどで層的な調査は神崎郡内では神河町福本遺跡だけである。福本遺跡は播磨の中でも早い段階に知られた遺跡で1952年に増田重信氏によって石器が採集され、1984年『旧石器考古学28号』で紹介されることによって兵庫県を代表する遺跡となった。その後、1982年から発掘調査が行われた。福本遺跡では純粋な火山灰層は確認できなかったが、始良丹沢火山灰を確認しており、今から2万年前の石器群と考えられている。ユニットを調査しており、接合資料もあり石器製作を行っていた地点であることがわかる。削器・両刃鏽器・縦長剥片があり、石材も頁岩・サメカイトが使用されている。香寺町高座遺跡では1点だけナイフ形石器が出土しており、福崎町西広畠遺跡でもナイフ形石器が、福崎町桜池東側で有舌尖頭器が出土している。

縄文時代の遺跡は福本遺跡で早期の土坑が調査されており、押型文土器が出土している。石器も豊富で、有舌尖頭器・石錐・楔形石器・削器・石錘・砥石・凹石・叩石・磨石・剥片が出土している。早い段階に知られた遺跡は溝口神ノ木遺跡である。地下げ工事中に鎌谷木三次氏によって弥生後期土器が、今里幾次氏によって縄文晩期土器が採集されている。周辺で縄文時代の遺物が出土、採集されているのは香寺町で平尻遺跡・岩部遺跡など9遺跡、福崎町林谷遺跡・西光寺遺跡など9遺跡が確認されているが、旧神崎郡に属する姫路市域（豊富町・山田町・船津町）では確認されていない。東前畑遺跡では溝・土坑が調査され、押型文土器1点と石錐が多数出土している。

弥生時代になると遺跡数は増加するが、前期の遺跡は神崎郡内では多いとは言えない。福本遺跡では遺構は検出されていないが、前期の土器が集中して出土している。中期後半の堅穴住居跡12棟と土器棺3基が調査されている。切り合いや建替えが認められる。市川町鶴居遺跡、香寺町門ノ坪遺跡、柳木遺跡で前期の土器が出土している程度である。中期前半までは船津町八幡遺跡など遺跡は少なく、中期後半になってから遺跡は増加する。郡内全域に広がるが、特に香寺町・福崎町域には遺跡が多く確認されている。東前畑遺跡では中期後半から後期にかけての集落で、堅穴住居跡4棟・掘立柱建物11棟・木棺墓5基が調査されている。掘立柱建物は独立棟持柱建物もあり、大型建物も存在する。多数の掘立柱建物が構築されていることは注目される。木棺墓からはガラス製垂飾・管玉が出土している。福崎町大明寺遺跡では堅穴住居跡が検出され、ガラス製玉が出土している。福崎町南田原長目遺跡は張り出した丘



第5図 高町遺跡周辺の地形

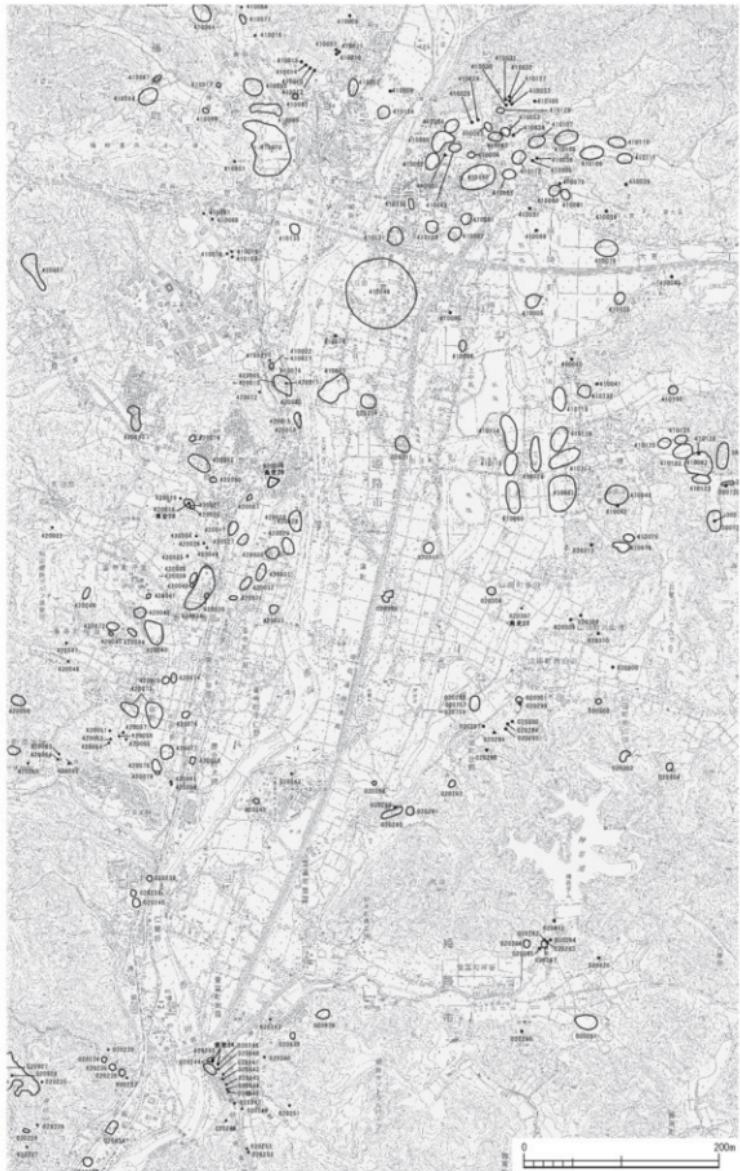
段丘 I	段丘 II	段丘 III	段丘 IV
段丘 V	段丘 VI	氾濫原	旧河道・谷底平野
扇状地	自然堤防		
凡例			

陵上に広がる遺跡で環濠集落であろうと思われ、磨製石剣・分銅型土製品が出土している。その南東部には風土記の糠塚に遺跡地とされる梗塚遺跡がある。その南東には播磨八幡遺跡が播但自動車道建設に伴って発掘調査が実施されている。中期後半の堅穴住居跡とそれより古くから築かれた墓域で構成された遺跡で、墓には方形周溝墓・円形周溝墓・土壙墓・土器棺墓と種類が多い。遺跡は1度廃絶し、庄内期に遺跡を再開し堅穴住居跡を構築している。播磨八幡遺跡の南東部の段丘上に位置する福崎町玉屋遺跡でも方形周溝墓・土壙墓が検出されている。福崎町北野寺西遺跡では円形周溝墓が、福崎町宮山遺跡・朝谷遺跡では土器棺が確認されている。これら集落は中期末で途絶え、後期後半に再開する。多くの遺跡は前記の遺跡が断続するものであるが、香寺町櫻ラ遺跡、福崎町中野田遺跡などはこの時期から集落を営みはじめる。丹波からの搬入土器が比較的多く見られる。

古墳時代の集落跡は福本遺跡で確認されている。方形プランの堅穴住居跡6棟が検出されている。6世紀後半から7世紀にかけてのもので、竈が作り付けられている住居跡も1棟ある。東前畠遺跡では3棟の堅穴住居跡と4棟の掘立柱建物、祭祀遺構が調査されている。中期の遺構で、祭祀遺構は土師器・滑石製模造品・鉄器が出土している。石製模造品は劍形・有孔円板・勾玉・臼玉の製品と未製品があり、管玉・糸玉は未製品が出土している。堅穴住居跡からも製品が出土している。

発生期の古墳は神崎郡南端の横山古墳群が著名である。市川を望む左岸丘陵上に営まれている。箱式石棺や石組を有する土器棺を主体部とするもので、前期にかけて構築されている。堅穴式石室・土壙墓・木棺直葬・土器棺と多様な埋葬施設を多数有する。7号墳は長さ32mの小規模な前方後円墳で、発生期の古墳と考えられている。中期古墳はないが、断続して後期古墳が山裾に築かれる。前期古墳では山田町清盛塚が小丘陵頂部に築かれており、堅穴式石室を埋葬施設とする全長45mの前方後円墳である。市川町親音山古墳も尾根頂上部に築かれた前方後円墳である。前方後円墳で堅穴式石室を埋葬施設とするが、出土遺物は確認されていない。それ以降、神崎郡域には主体部は箱式石棺が多くなる。香寺町法花堂2号墳・北川古墳・片山古墳・柏尾狐塚古墳・福崎町大善寺裏山古墳・高橋古墳群が確認されている。

寺院跡は香寺町溝口庵寺と山田町多田庵寺が知られている。溝口庵寺は薬師寺式伽藍配置と推定され、塔跡が残っている。多田庵寺は早くに削平され礎石が残っているだけである。2ヶ寺の軒丸瓦は同范瓦と考えられ、福崎町に接する加西市吸谷庵寺（賀茂郡修布里）とも同范の可能性が高い。また、溝口庵寺の補修瓦は興福寺・下野薬師寺・姫路市本町遺跡と同范で、興福寺を中心とした関係が想定できる。遺構は確認されていないが、福崎町福田の無量寺遺跡からは重圓文軒丸瓦などが出土している。福本遺跡では、建物は確認されていないが、奈良時代の瓦窯跡が5基検出されていることから近くに寺院が存在する可能性が高い。神崎郡で4ヶ寺建立されたことになる。7世紀末採業の古い瓦窯跡であるが、寺院跡は確認されていない。全面調査した1・2号窯跡は無頬斜窯窓という数少ない類例であることが注目される。軒丸瓦は単弁蓮華文2種で、重弧文と均整唐草文の軒平瓦があり、丸瓦も行基葺きと玉縁式がある。道具瓦も多く見られる。瓦窯跡は郡内南端の祇堀と香寺町東前畠遺跡にも存在し、福崎町福井谷窯跡でも瓦が僅かながら焼成されている。須恵器窯跡は郡内に広く見られ、播磨國風土記の高岡里（和名類聚抄では楓田郷）だけが窯跡は確認されていない。福井谷窯跡ではが出土している。福井谷窯跡の南側飯盛山南麓には鶴尾を棺に利用した古墓が検出されている。奈良時代の集落跡も多くは調



第6図 周辺の遺跡



第7図 高町遺跡の位置と周辺の遺跡

- | | | | |
|------------|---------------|-----------|-----------------------|
| 1. 高町遺跡 | 2. 荒田遺跡 | 3. 星田遺跡 | 4. 柿ノ木町遺跡 |
| 5. 柳木遺跡 | 6. 岩部遺跡 | 7. 門ノ坪遺跡 | 8. 平尻遺跡 |
| 9. 東前畠遺跡 | 10. 東前畠窯跡 | 11. 土師Ⅰ遺跡 | 12. 溝口魔寺跡 |
| 13. 土師Ⅱ遺跡 | 14. 高座遺跡 | 15. 片山西古墳 | 16. 片山古墳・片山古墳群1号墳・2号墳 |
| 17. 堂ヶ谷古墳 | 18. 向山1号墳・2号墳 | 19. 狐塚古墳 | 20. 地藏山1号～4号古墳 |
| 21. 北川古墳 | 22. 勒使塚古墳 | 23. 雨ヶ代遺跡 | 24. 柏尾古墳群 |
| 25. 柏尾狐塚古墳 | 26. 田野遺跡 | 27. 大飼遺跡 | 28. 中仁野遺跡 |
| 29. 宮ノ後遺跡 | 30. 玉塚古墳 | 31. 甲丘古墳 | 32. 仁色窯跡 |
| 33. 八幡遺跡 | | | |

査されておらず、郡衙推定地も確立していない。香寺町に調査例が多く、東前畠遺跡・高座遺跡・櫻ヶ遺跡・土師II遺跡で掘立柱建物が調査されている。土師II遺跡では3棟の掘立柱建物があるが、主軸方位が異なっており、計画的な集落とは思われない。余り時期差のない堅穴住居跡も存在する。鉄滓が出土していることが遺跡の性格を示しているようである。土師II遺跡は溝口廃寺の北西方向に位置し、東前畠遺跡と同じ微高地に立地している。東前畠遺跡は微高地先端に位置し、段丘崖が3面あり遺跡範囲となっている。段丘崖には瓦窯跡が構築され、段丘上には主軸方向を変えた2時期の建物群・井戸・土壙などが検出されている。掘立柱建物は24棟確認されており、その中には3×6間の大型側柱建物も存在する。同時期に馬蹄形の大型竈を有する堅穴住居跡も検出されている。工房跡であろうか。墨書き器・円面鏡・瓦が出土している。高座遺跡は土師II遺跡西側に広がる遺跡で、2間を基本とした側柱建物が19棟確認されており、柵で囲まれた官衙的な集落である。

第3章 調査結果

2回の確認調査の結果を受けて、第3次確認調査を実施した。遺物が出土し遺構面も確認したもの、明瞭な遺構が検出されなかつたことによる。遺跡の存在する可能性の高い微高地上にトレーンチを設定した。当初、4本のトレーンチを設定する予定であったが、中央に水路が通っていることから、水路を跨ぐように8本のトレーンチを設定して調査を行つた。その結果、2トレーンチで包含層を確認し、7・8トレーンチで遺構を検出した。ただ、2トレーンチの包含層の範囲は狭く、また7・8トレーンチも遺構の広がりが限定されていることから、継続して全面調査に移行した。

2面の遺構面を確認した。上面は古墳時代～中世にかけてのもので、下面は弥生時代末のものである。下面では明瞭な遺構は確認されていない。2トレーンチは下面だけで、やはり遺構は検出されなかつた。上面はすでに削平されたか存在しておらず、新しい遺物もほとんど出土していない。

層序は、耕土一床土一（耕土主体の盛土一床土）一暗灰細砂一灰黄極細砂である。暗灰細砂が弥生後期包含層で、その上面が遺構面である。

検出した遺構は掘立柱建物・溝・土坑・落ち込み・ピットで、時期は古墳時代後期から室町時代である。出土遺物は弥生時代後期から近世までと幅がある。下面是弥生時代末～古墳時代前期で包含層だけでは遺構は検出していない。上面の遺構は、3時期ある。

第1節 室町時代の遺構と遺物

土壤SK01が該当する。小土坑で長径68cm、短径60cmの楕円形で深さ14cmを測る。確認トレーンチで一部を欠いている。遺構の状況からは明らかにしがたいが、出土遺物に鉄刀と土師器皿があることから墓の可能性が高いと思われる。(3)(4)は土師器皿である。(3)は器高13cmの浅いもので、平底から短く外傾し端部丸く納める。底面はヘラ切りを行い、全体はヨコナデで仕上げている。内面は仕上げナダが施され、砂粒比較的多く含んでいる。(4)はユビ成形のちナダ仕上げを行つた皿で細かな砂を含んでいる。1.1cmと浅いもので内湾している。(M2)は刀子の切先部分である。長さ11.7cm残存しており、幅1.55cmで片刃である。

第2節 平安時代後期～鎌倉時代の遺構と遺物

(1) 遺構

上面で検出した掘立柱建物2棟、溝3条など大半の遺構がこの時期に該当する。SB02と溝は主軸方向が同じことから同時期と思われる。SB01はやや主軸方向が異なつており、時期差があるものと思われる。

SB01は調査区西側に延びたことから、一部拡張した。さらに柱通りを確認したが、西側では認められなかつたので、2×3間の總柱建物と考えられる。東西辺は6.2mで柱間は北から2.1・2.1・2.0mである。南北辺は6.0mで柱間は3.0mである。柱穴の大きさは30cm前後で深さは20cmぐらいである。中央部分がやや深いが大きな差はない。北辺北側の中央ライン延長上2.3mに柱穴があるが東西方向には存在しない。主軸方向はN20°Eである。出土遺物は少なく、土師器・須恵器の小片で、図化できなかつた。

SB02は調査区東側で検出している。1×2間の南北棟で主軸はN30°Eである。南北と西側には延びないが、東側には延びている可能性はある。南辺の延長部分のみ確認したが、柱穴は認められなかつた。

た。東側が低くなっていることから、削平されたことも考えられる。南北5.4m（柱間27m）、東西3.0mを測る。

SX01はSD02に切られた不定形の落ち込みである。東側の端部は確認トレンチによって切られている最大長4.1m、南北長3.4m、深さ0.1～0.3mを測る。底面はわずかな凹凸はあるものの比較的平坦である。

SD01とSD02は平行に走っており、同時期の遺構である。幅0.2m、深さ0.15mで断面U字形を呈している。2本とも南側は7トレンチで切られている。検出長はSD01が5.0m、SD02が断続しているが16.0mを測る。SD03は2本の溝と直交する位置に走っている。幅は2本より広く一定の幅を有さない。0.6～1.4mと幅があり、深さも0.1～0.3mと変化している。西側は調査区内で終息しており、東側は調査区外へ延びている。検出長は18.0mである。

土坑SK02とSK04は時期が明確でないが、この時期の可能性が高い。SK02は南北0.6m、東西0.3mの長方形で深さ0.2mを測る。遺物は出土していない。SK04は南北0.4m、東西0.3mの不定形を呈しており、深さ0.2mである。

（2）遺物

SD03からは時期幅のある遺物が出土している。図化したものは3点で、(7)は弥生後期の壺底部である。底部再成形の突出平底で不安定である。にぶい橙を呈し外反する体部になる。粘土繊の雜ざり残り、砂粒を含んでいる。(8)は円筒埴輪で直立している。内面にぶい黄橙、外面淡赤橙で小環を含むものの胎土は緻密である。タガ部分は欠失しており、断面形状は不明である。表面磨滅しているが、縦方向のハケがなされているようである。顔料が塗布されていた可能性もある。(9)は須恵器椀口縁部である。外傾し端部は丸い。ロクロナデで灰～灰白を示す。大半は須恵器・土師器であるが、埴輪片や古墳時代須恵器と弥生土器片も出土している。

SX01出土遺物（10～14）

出土遺物は須恵器・土師器・瓦器で4点図化している。(10)(11)は土師器羽釜である。(10)は内湾する体部から大きく内湾する口縁部になり、端部角張る。最大腹径の部分に鈎部を付けている。水平方向からやや上向きの短い鈎である。体部内面は強いナデ、外表面はナデ、口縁部はヨコナデである。灰白を呈し、砂粒含んでいる。(11)は小片で、内傾ぎみの体部から内湾する口縁部で端部はやや肥厚ぎみに角張る。鈎は水平に2cmほど伸び、端部角張る。鈎部はユビ成形からナデで、全体にヨコナデ仕上げである。口縁端部周辺に煤付着しており、砂粒含みにぶい黄橙をしている。(12)は須恵器椀口縁部である。外傾し端部丸く納める。細砂含み、ロクロナデで灰をしている。端部に重ね焼きの痕跡残る。(13)は須恵器捏鉢口縁部小片である。外傾し端部肥厚ぎみで上方につまみ上げている。ロクロナデで重ね焼きの跡認められる。灰～灰白を呈し、細砂含む。

第3節 古墳時代後期の遺構と遺物

SK03がこの時期の遺構である。南北1.0m、東西0.9mの不定形で深さ0.3mを測る。比較的底面は平坦で、肩部も直に近い形状である。須恵器2点と鉄器1点が出土している。杯身と杯蓋1点ずつで口縁部を上にして置かれている。杯は天地が逆転する時期のものである。(1)は杯蓋で平坦ぎみの丸い天井部から内湾する体部で、端部は外側に尖るように丸く納めている。天井部はヘラ切りで、内面は仕上げナデが施されている。体部はロクロナデで砂粒を含んでいる。全体的に磨滅しており、歪である。(2)

は杯身で凹凸のある丸底から内湾する体部になる。器壁に凸凹があり、端部は丸くやや外に反っている。体部から内面はロクロナデで底面はヘラ切りである。灰白を呈し、細かな砂粒を含んでいる。(M1)は鉄器の破片で断面が長方形であることから茎部であろうか。刃は有さない。

第4節 包含層の遺物

(1) 弥生時代末～古墳時代前期の遺物

明確な遺構は検出していない。包含層から遺物が比較的多く出土している。

壺(14～25)

(14)は内湾する体部から外傾する頸部になり、外反ぎみの口縁部で端部内外に肥厚する。外面は平行からやや右上がりのタタキからハケ整形で、内面はユビ成形からハケ整形である。頸部から口縁部はハケ整形からヨコナデ仕上げである。(15)は外反する口縁部で端部内外に肥厚する。ハケ整形からヨコナデで、内外面ともヘラミガキで仕上げている。にぶい橙～灰白を呈し、細砂含んでいる。器台裾部の可能性もある。(16)は外反し端部は上方につまみ上げている。灰白で砂粒含んでいる。ヨコナデ仕上げで、磨滅しており跡著でないが内外ともヘラミガキかと思われる。(17)も外反する口縁部で端部内外に肥厚する。粘土紐の継ぎ目で割れており、二重口縁の可能性が高い。外面は綫方向のハケ整形から横方向のミガキで仕上げる。内面は斜めから横方向のミガキを施し、端部周辺はヨコナデである。(18)は二重口縁壺で直立する頸部から外反し水平に近くなって擬口縁から外反する口縁部になる。端部は丸く僅かに上方につまむ。頸部はハケ整形からヘラミガキを行う。ミガキは横方向から綫方向と丁寧に行っている。口縁部もヘラミガキで丁寧に調整しているが、その割に小穢や粗砂を含んでいる。にぶい黄橙～灰を呈し、器肉は灰白である。(19)は球形の体部で、長めの外反する頸部から口縁部になり、端部は細く角張る。頸部に断面三角形の突帯を付け、刻み目を入れる。外面はハケ整形からヘラミガキを施し、体部内面はナデで粘土紐の継ぎ目残る。(20)は下膨れの丸底の底部である。外面はタタキからハケ整形しナデ調整している。外面とも粘土の継ぎ目見られる。にぶい黄橙からにぶい橙を呈し、砂粒含む。(21)(22)は二重口縁の長頸壺である。(21)は球形の体部から短い頸部になり長く外反する口縁部で端部尖る。体部内面はユビ成形からナデ整形にとどまるが、他はヘラミガキで丁寧に仕上げている。綫方向の粗いものから横方向の細かいミガキを行う。丁寧な仕上げであるが、粘土紐の痕跡残している。(22)も同様のタイプでミガキで仕上げている。(23)は底部で球形の体部に底部再成形で突出平底を付けている。外面はにぶい赤褐からにぶい黄橙で平行タタキをナデ調整している。内面はくもの巣状のハケ整形である。(24)(25)は二重口縁の山陰系の口縁部である。ヨコナデ仕上げで磨滅している。(25)はヘラミガキの可能性がある。

壺(26～43)

(26)は大型の口縁部の破片で口径は復原できなかった。灰白でヨコナデ仕上げである。(27)は口径が最大径となるもので、直立ぎみに内湾する体部から外反する口縁部になり端部丸い。外面はにぶい橙で粗い平行タタキ、内面は橙でハケ整形、口縁部のみヨコナデ仕上げ。(28)は内傾する体部から外傾する口縁部で端部は外側につまみ丸く納める。外面は右上がりのタタキで、内面は横方向の強いナデ。(29)は外反する口縁部でタタキ成形から口縁部を作り出している。外面はハケ整形からヨコナデ仕上げ。(30)は貴重な全体がわかる壺で、小さな平底から内湾する長めの体部で、口縁部は外反する。分割成形でタタキの方向を変えている。内面は板ナデを施し、頸部下は強いナデで成形している。灰白から淡

赤橙をし、砂粒含んでいる。(31)は内傾する体部からヨコナデ仕上げの外反する口縁部になる。外面は右上がりのタタキ、内面はヘラケズリである。(32)は外反する口縁部で端部丸い。にぶい橙でヨコナデ仕上げ。(33)は内湾する体部から外反する口縁部である。器壁の厚さが口縁部は薄く、体部は厚い。外面タタキ、内面ハケであるが、磨減著しい。(34)は内湾する体部で端部丸い外傾する口縁部である。外面はハケ整形で灰白～灰黄褐を呈し、内面は板ナデでにぶい黄橙である。(35)も内湾する体部から外反する口縁部になる。外面は継方向のタタキからハケ整形で、内面は粗いハケ（貝殻の可能性も）整形、口縁部はヨコナデである。(36)は尖りぎみの丸底で外面はタタキ、内面はユビ整形からナデで黒斑を有する。強く被熱している。(37)は内湾する体部から強く外反する口縁部になり端部丸い。外面はタタキから継方向のハケ整形、内面はいたナデである。灰白を呈し砂粒含む。口縁部歪んでおり黒斑が認められる。(38)は内湾する体部から外反する口縁部で端部尖るが部分的に面になる。右上がりのタタキからハケ整形で、内面はユビ整形。口縁部内面はハケ整形でヨコナデ仕上げ。(39)は小さな平底から内湾する体部になる。浅黄橙で外面は平行タタキからナデ、内面はヘラケズリである。(40)は小さな平底で僅かに上げ底となる。にぶい橙を呈し、外面はヘラミガキで丁寧に仕上げる。窓の可能性もある。(41)は丸底で外面タタキ、内面ヘラケズリ整形で一部ナデを施す。(42)は上げ底となる底部でナデ仕上げである。直線ぎみに延びる体部は内外面ともハケ整形で明褐灰を呈す。(43)は底部再成形の平底で体部は直線的に延びる。タタキ成形で底面には木葉痕が見られる。内面は暗灰で放射状に板ナデ整形を行う。

鉢 (44~48)

(44)は大型で口径が最大径となる。外反する口縁部で端部は角張り上方に肥厚している。頭部内面稜線は甘く、体部は僅かに内湾する。ハケ整形と思われるが磨減顯著で、浅黄橙～灰白を呈し砂粒含む。(45)(46)は丸底の浅い鉢で分割成形の下半部である。内湾し端部尖りぎみである。(45)は外面灰黄褐で平行タタキをヘラケズリに近い板ナデで整形している。内面ににぶい黄橙で放射状の板ナデで、黒斑が認められる。(46)は外面タタキ、内面ハケ整形で端部周辺のみヨコナデを施す。(47)は平底に近い丸底で、内湾し甘い稜線の短い頭部から外傾する二重口縁部であるが、端部は欠いている。口縁部はヨコナデ、内面は下半がユビナデで上半は板ナデ、外面はヘラミガキである。小型丸底窓とした方が良いかもしれない。(48)は小さな平底から内湾し僅かな頭部から直立に短く延びる口縁部となり端部は尖る。内外面・底面ともにハケ整形で口縁部はヨコナデ仕上げ。

高杯 (49~56)

(49)は浅い杯部で水平に開き大きく外反する口縁部で端部尖る。外面はハケ整形ののち横方向のヘラミガキで仕上げる。内面も横方向のヘラミガキで端部はヨコナデ仕上げ。(50)は段を有するが外傾し端部角張り、上方につまみ出す。外面はハケ整形からヘラミガキ、内面もミガキ。(51)は深めで内湾ぎみから外傾し端部尖る。内面はヘラミガキであるが、外面は粗く板ナデで黒斑が見られる。(52)は外反してから端部が大きく肥厚し、上方につまみあげるものである。端部を欠いている。(53)は外傾する杯部下半で直立するものと思われる。外面はハケ整形、内面はミガキである。(54)は深めの杯部で端部を欠いている。変化部は下方に突出してから外反している。ハケ整形でにぶい橙をしている。(55)は中空の筒部で杯部は内湾し、裾部は外傾する。杯部内面と筒部外表面はヘラミガキ、裾部はハケ整形で4方透孔。(56)は短い中実で裾部は外反し、端部はやや上がる。中実だが中央に細い穿孔が見られる。ハケ整形し外面はヘラケズリである。

器台（57～61）

(57)は上台で外反する筒部が大きく外反する口縁部下側に付く。端部は丸く、口縁下端部は外側に突出している。筒部は縱方向、口縁部は横方向のヘラミガキで仕上げている。灰白～にぶい黄橙を呈する。(58)は下台部で外傾し端部は丸くやや外に聞く。外面はタタキからハケ整形、内面はハケ整形で上台内面はヘラケズリ。(59)は外反する下台部に外傾する上台部が付く。上下とも端部は残存していない。下台内面は横方向のヘラケズリで他はヘラミガキで仕上げる。(60)は外傾する下台で端部は外側に尖っている。ハケ整形ののち外面はミガキを行う。大きさ・個数は不明であるが、円孔が見られる。(61)は外傾する下台で3方透孔である。端部は尖りぎみになりハケ整形である。外面と筒部内面はヘラケズリで、上台はヨコナデが見られる。橙を呈し、器壁は厚い。

（2）古墳時代後期の遺物（62～70）

(62)(63)は円筒埴輪で、(62)は外傾し端部近くでやや反り角張る。タガは端部から2cm下に位置し断面M字形である。明掲灰～灰白を呈し、縱方向のハケ整形の後タガを付け、ナデ・ヨコナデで仕上げている。内面は粗いケズリで、粘土紐を残している。(63)は端部角張る小片で端部にタガが接している。タガは断面台形で下向きである。灰白でヨコナデ仕上げ。

(64)は土師器瓶把手部破片である。断面方形で不定円形になろうかと思われる。ナデ仕上げである。

(65)～(70)は須恵器で、(65)～(67)は杯蓋・(68)(69)は杯身・(70)は高杯である。(65)の天井部は丸みを持ち、後線を持たずに垂下し端部は平たく外側につまみ出す。灰白で天井部はロクロケズリである。(66)は内湾する天井部から体部で口縁部は外傾し、端部は外側に尖っている。灰白を呈し、全体に磨滅している。(67)は口径14cmと大きいもので内湾し端部尖る。ロクロナデで、天井部はヘラ切りで未調整である。灰黄を示し、細砂含む。(68)は外傾ぎみの体部から変化して外傾する口縁部になり端部丸い。ロクロナデで外面自然釉付着している。(69)は器壁の厚い丸底から外傾する体部になり、後線を持って外反する口縁部になる。端部は丸く、灰白を呈する。底部ヘラ切りである。(70)は低く外反する脚部で据近くは水平に延び、下方につまみ出す。ロクロナデで灰を呈する。

（3）古代中世の遺物（71～79）

(71)は土師器甕でくの字で端部は上方につまみ上げる。内外面ともにハケ整形で端部周辺はヨコナデである。体部は直立ぎみで砂粒多く含む。(72)は土師器鍋口縁部の小片である。やや内傾し、短い鶴部で端部を欠いている。(73)～(77)は須恵器椀である。(73)は内湾し端部は丸く外反している。(74)は内湾し端部外側に尖っている。灰～灰白を呈しシャープな作りである。(75)～(77)はロクロナデ・糸切りの底部であるが、形状は異なっている。(78)は土師器小皿でロクロナデで、底部はヘラ切りである。口径7.8cm、器高1.5cmと小さい。(79)は土師器土鍾である。中央が太く両端が細くなっている。

第1表 高町遺跡出土遺物観察表

No	種別	器種	出土遺構	法量(cm)			色調		残存度	備考
				口径	器高	底径	外面	内面		
1	須恵器	杯蓋	SK03	12.6	4.2		灰白	黄灰	ほぼ完	歪
2	須恵器	杯身	SK03	11.6	4.7		灰白	灰白	ほぼ完	
M1	鉄器	鏃	SK03	(3.4)	0.9	0.3			断片	
3	土師器	皿	SK01	(8.0)	1.3	6.0	にぶい橙	にぶい橙	1/2	
4	土師器	皿	SK01	7.9	1.1		にぶい橙	灰白	1/2強	
M2	鉄器	刀子	SK01	(11.7)	1.55	0.5			1/2	
5	土師器	皿	P15	(8.6)	1.3	5.8	淡橙	淡橙	2/3	
6	土師器	羽釜	P9	(14.2)	(4.5)		橙	橙	1/2	
7	土師器	壺	SD03		(3.9)	(7.0)	にぶい橙	にぶい橙	1/5	
8	埴輪	円筒	SD03		(6.7)		淡赤橙	にぶい黄橙	破片	
9	須恵器	椀	SD03	(15.7)	(3.0)		灰	灰	1/10	
10	土師器	羽釜	SX01	(23.3)	(9.0)		灰白	灰白	1/6	
11	土師器	羽釜	SX01		(5.6)		灰白	灰白	破片	
12	須恵器	碗	SX01		(2.9)		灰	灰	破片	
13	須恵器	捏鉢	SX01		(4.3)		灰白	灰白	破片	
14	土師器	壺	暗黄灰細砂	(20.0)	(13.6)		にぶい黄橙	灰白	1/2	
15	土師器	壺	暗黄灰細砂	(23.5)	(3.0)		にぶい橙	にぶい橙	小片	
16	土師器	壺	暗黄灰細砂	(20.5)	(2.4)		灰白	灰白	1/8	
17	土師器	壺	暗黄灰細砂	(21.0)	(4.0)		にぶい橙	にぶい橙	小片	
18	土師器	壺	暗黄灰細砂	(21.3)	(7.0)		灰白	にぶい黄橙	1/6	
19	土師器	壺	暗黄灰細砂	(10.8)	(15.4)		灰白	灰白	1/4	
20	土師器	壺	暗黄灰細砂		(10.9)		にぶい橙	にぶい橙	破片	
21	土師器	壺	暗黄灰細砂	(10.3)	(10.7)		淡黄橙	にぶい橙	1/2	
22	土師器	壺	暗黄灰細砂		(4.3)		にぶい橙	にぶい橙	1/8	
23	土師器	壺	暗黄灰細砂		(8.0)	4.9	にぶい赤橙	にぶい黄橙	底部完	
24	土師器	甕	暗黄灰細砂	(11.2)	(4.5)		灰白	灰白	破片	
25	土師器	甕	暗黄灰細砂	(10.7)	(5.1)		にぶい黄橙	にぶい黄橙	1/4	
26	土師器	甕	暗黄灰細砂		(4.6)		灰白	灰白	小片	歪、粗製
27	土師器	甕	暗黄灰細砂	(11.8)	(5.4)		にぶい橙	橙	1/4	
28	土師器	甕	暗黄灰細砂	(10.7)	(3.4)		灰白	灰白	1/4	
29	土師器	甕	暗黄灰細砂	(13.7)	(2.3)		にぶい橙	にぶい橙	1/8	
30	土師器	甕	暗黄灰細砂	10.9	12.1	1.6	灰白	灰白	2/3	
31	土師器	甕	暗黄灰細砂	(13.0)	(3.7)		明褐灰	浅黄橙	1/8	
32	土師器	甕	暗黄灰細砂	(15.1)	(2.1)		にぶい橙	にぶい橙	1/8	
33	土師器	甕	暗黄灰細砂	(15.0)	(3.3)		にぶい黄橙	橙	1/10	
34	土師器	甕	暗黄灰細砂	(12.9)	(8.0)		灰白	にぶい黄橙	1/4	
35	土師器	甕	暗黄灰細砂	(13.0)	(4.8)		にぶい黄橙	にぶい黄橙	1/8	
36	土師器	甕	暗黄灰細砂		(8.1)		灰白	にぶい褐	底部完	
37	土師器	甕	暗黄灰細砂	(15.8)	(11.3)		灰白	灰白	3/4	

No	種別	器種	出土遺構	法量(cm)			色調		残存度	備考
				口径	器高	底径	外丽	内面		
39	土師器	甕	暗黄灰細跡		(3.9)	1.2	にぶい黄橙	浅黄橙	底部完	
40	土師器	甕	暗黄灰細跡		(3.4)	1.4	にぶい橙	にぶい橙	底部完	
41	土師器	甕	暗黄灰細跡		(3.4)		褐灰	にぶい橙	底部完	
42	土師器	甕	暗黄灰細跡		(3.1)	(3.2)	明褐灰	にぶい黄橙	底部完	
43	土師器	甕	暗黄灰細跡		(2.3)	4.6	にぶい黄橙	暗灰	底部完	木葉痕
44	土師器	鉢	暗黄灰細跡	(31.6)	(6.1)		浅黄橙	浅黄橙	1/6	
45	土師器	鉢	暗黄灰細跡	(14.3)	(6.3)		灰黄褐	にぶい黄橙	2/3	
46	土師器	鉢	暗黄灰細跡	(16.1)	6.9		灰白	灰白	1/2	
47	土師器	小型丸底壺	暗黄灰細跡		(6.0)		灰黄褐	灰黄褐	1/4	
48	土師器	鉢	暗黄灰細跡	(8.4)	6.3		浅黄橙	にぶい橙	底部完	
49	土師器	高杯	暗黄灰細跡	(25.5)	(4.0)		にぶい橙	にぶい橙	1/8	
50	土師器	高杯	暗黄灰細跡	(25.9)	(3.6)		にぶい橙	にぶい橙	1/8	
51	土師器	高杯	暗黄灰細跡	(16.5)	(4.3)		灰黄	にぶい黄橙	1/12	
52	土師器	高杯	暗黄灰細跡		(1.8)		橙	橙	破片	
53	土師器	高杯	暗黄灰細跡		(2.7)		にぶい橙	にぶい橙	1/8	
54	土師器	高杯	暗黄灰細跡		(4.8)		にぶい黄橙	にぶい橙	1/4	
55	土師器	高杯	暗黄灰細跡		(10.7)		灰黄褐	灰黄褐	柱状部完	
56	土師器	高杯	暗黄灰細跡		(8.1)		にぶい黄橙	にぶい黄橙	1/2	
57	土師器	器台	暗黄灰細跡	(25.4)	(5.0)		灰白	灰白	1/4	
58	土師器	器台	暗黄灰細跡		(11.4)	(14.8)	にぶい橙	橙	1/2	
59	土師器	器台	暗黄灰細跡		(8.4)		灰白	浅黄橙	柱状部完	
60	土師器	器台	暗黄灰細跡		(3.4)	(16.5)	にぶい橙	橙	1/6	
61	土師器	器台	暗黄灰細跡		(9.0)	(13.6)	にぶい橙	橙	1/3	
62	埴輪	円筒	暗黄灰細跡	(25.5)	(8.0)		明褐灰	明褐灰	破片	
63	埴輪	円筒	暗黄灰細跡		(4.4)		灰白	灰白	破片	
64	土師器	瓶	暗黄灰細跡		(5.3)		灰白	灰白	把手完	
65	須恵器	杯蓋	暗黄灰細跡	(10.4)	(3.6)		灰白	灰白	1/5	
66	須恵器	杯蓋	暗黄灰細跡	(10.4)	(4.1)		灰白	灰白	1/4	
67	須恵器	杯蓋	暗黄灰細跡	(14.0)	4.5		灰黄	灰黄	1/10	
68	須恵器	杯身	暗黄灰細跡	(11.4)	(2.8)		灰	灰	1/8	
69	須恵器	杯身	暗黄灰細跡	(11.1)	(4.4)		灰白	灰白	1/4	
70	須恵器	高杯	暗黄灰細跡		(3.3)	7.6	灰	灰	脚部完	
71	土師器	甕	暗黄灰細跡	(28.0)	(7.4)		にぶい橙	にぶい赤橙	1/6	
72	土師器	羽釜	暗黄灰細跡		(5.0)		灰白	灰白	破片	
73	須恵器	椀	暗黄灰細跡	(15.6)	(2.5)		灰	灰	1/12	
74	須恵器	椀	暗黄灰細跡	(13.4)	(4.0)		灰	灰	1/10	
75	須恵器	椀	暗黄灰細跡		(2.4)		灰白	灰白		
76	須恵器	椀	排土		(2.5)	(7.8)	灰白	灰白	1/3	
77	須恵器	椀	7トレ拉張		(2.7)	5.9	灰白	灰白	底部完	
78	土師器	皿	表土	(7.8)	1.5	(5.1)	にぶい橙	にぶい橙	1/4	
79	土製品	土鍤	排土	3.5	1.0	0.9	浅黄橙	浅黄橙	完	

第4章 おわりに

3回の確認調査と一部345m²と小面積の本発掘（全面）調査を実施した。3回合わせても2週間に満たない短期間の調査ではあったが、少なからず成果を上げることが出来た。恒屋川河川改修に伴う調査で、報告書作成予定年度に兵庫県南部地震を蒙り、報告書刊行までに20年以上の年数を経たことになる。従前の調査では弥生時代中期の遺物が出土していたが、今回の調査では古墳時代後期から近世にかけての複合遺跡であることが明らかになった。

近世から最近新たに家屋が築かれるまでは耕作地になっており、南北方向の動溝が見られた。確認調査したトレンチでも確認されている。同一方向の動溝で、直線の痕跡に限られている。

中世は、掘立柱建物跡が2棟検出されている。土坑・溝も同じ時期と思われる。中世後期の可能性が高く微高地に小集落が営まれていたのであろう。

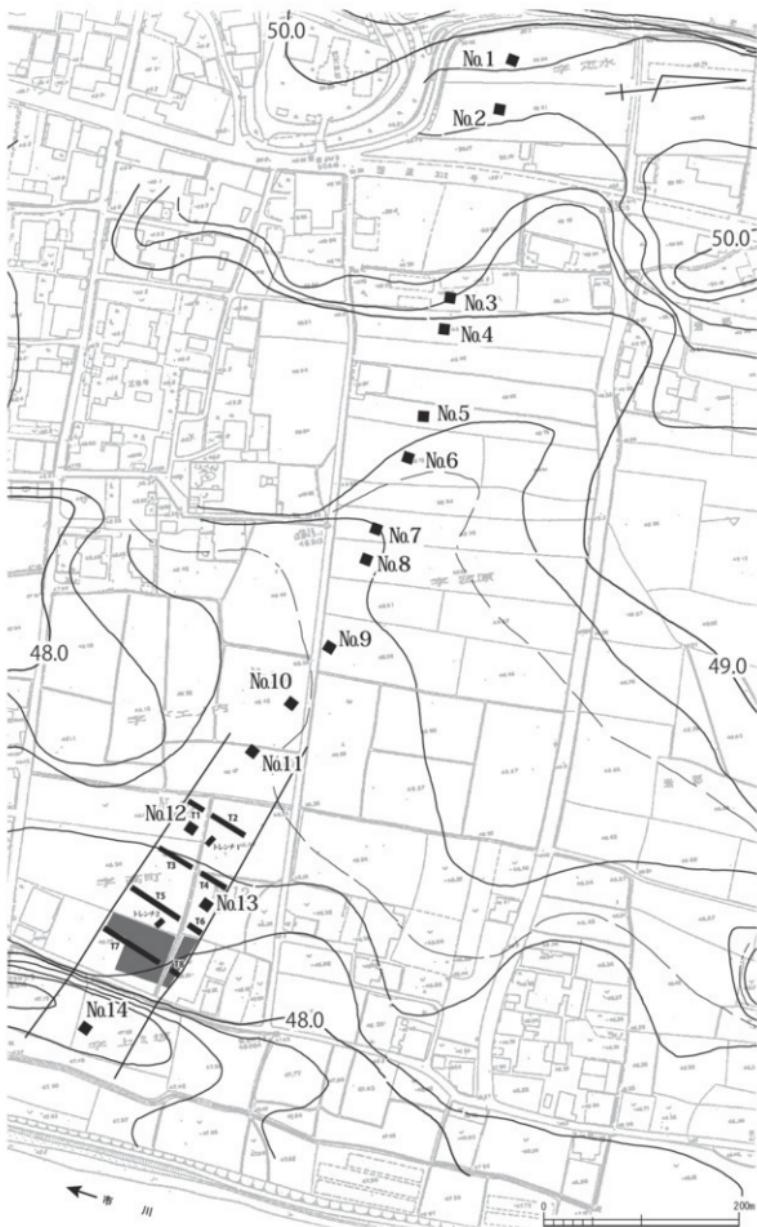
古墳時代後期の遺構は土坑だけであるが、生活していたことは明らかである。ほ場整備などの調査結果からも古墳時代から奈良時代にかけて周辺で集落を営んでいたことが明らかであり、土師廐寺へと引き継がれる。古墳時代前期は比較的多くの土器が出土しているが、遺構は検出されていない。

出土遺物は弥生時代末から古墳時代前期にかけての土器が多数出土している。周辺にはこの時期の集落跡は確認されていないが、前期古墳が市川の両岸ともに存在していることから、集落存在の可能性は高い。後期になると広範な地域に集落跡が認められる。その先駆けとなった集落跡かもしれない。東前畠遺跡や犬飼遺跡は香寺町市街地に近く、前期古墳とも近接している。そうすると沖積地に立地する遺跡は性格が異なるかもしれない。遺構が確認されていないことから推定の城を出ないが、新しい集落や古墳と関連しない集落の可能性を考えている。



第8図 調査風景

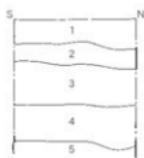
図 版



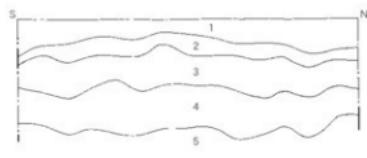
調査位置図

図版2

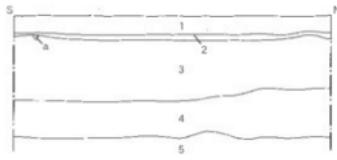
No.1 トレンチ西壁



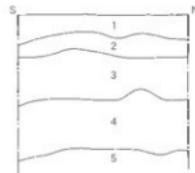
No.2 トレンチ西壁



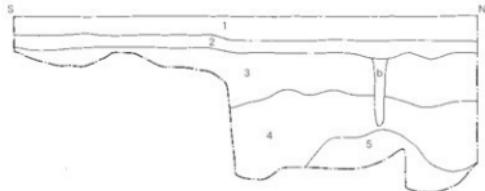
No.3 トレンチ西壁



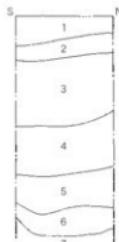
No.4 トレンチ西壁



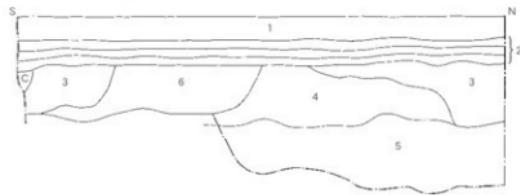
No.5 トレンチ西壁



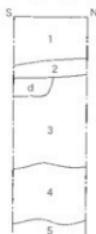
No.6 トレンチ西壁



No.7 トレンチ東壁

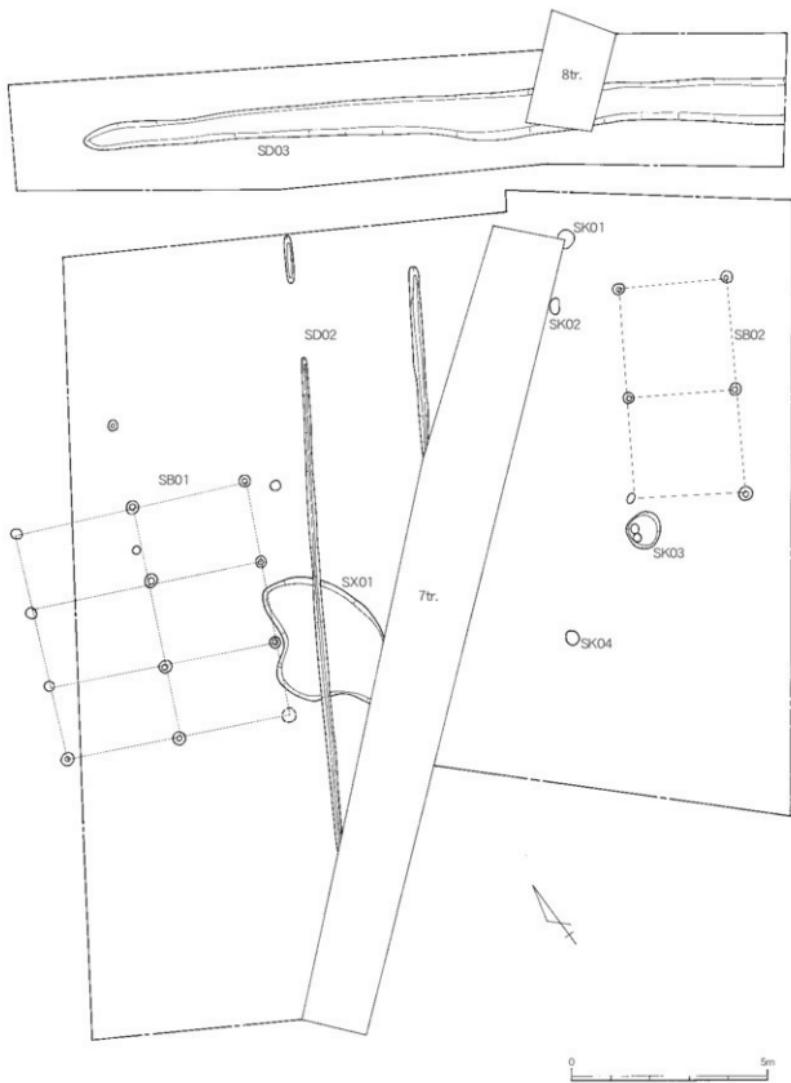


No.8 トレンチ東壁



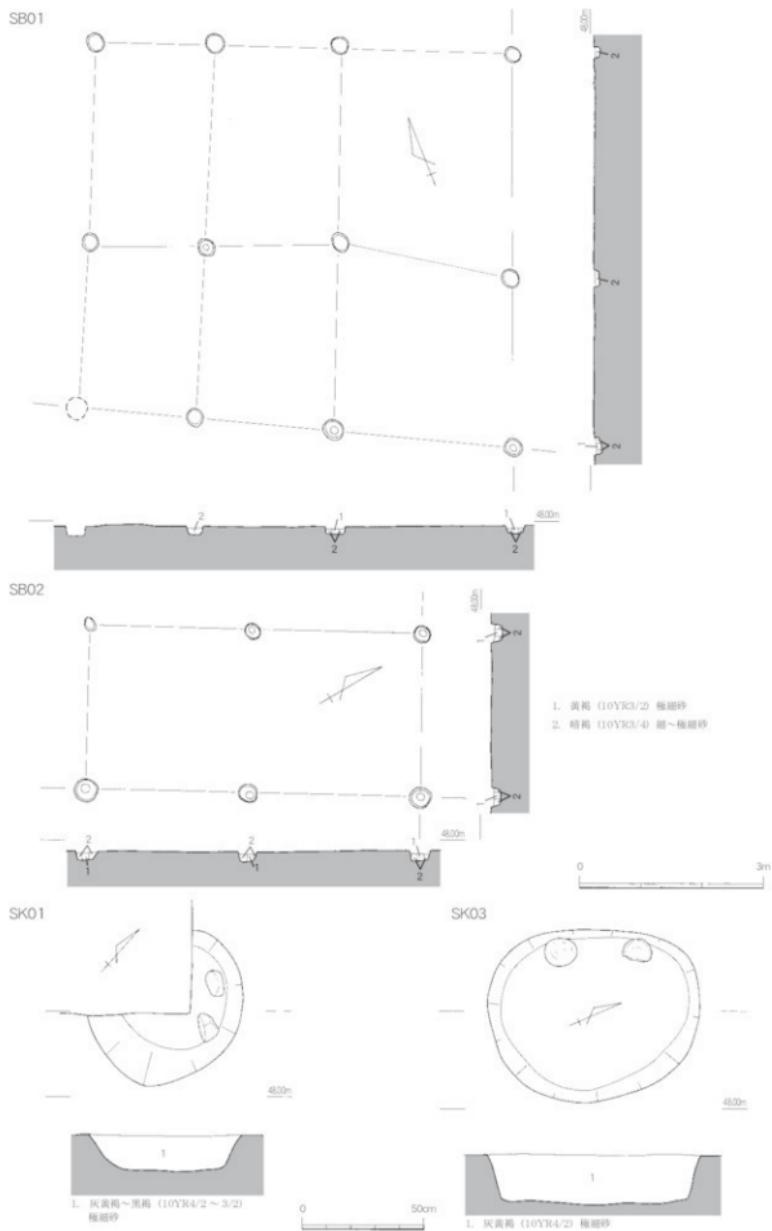
- | | |
|---------------------------|-------------------|
| 1. 純土 | a. 暗褐 細砂（鐵浜） |
| 2. 床土 | b. 暗褐 細～粗細砂 |
| 3. 純茶褐色 極細砂～中砂 Mn質 | c. 灰黃褐 極細砂 (SK01) |
| 4. 純灰褐色 極細砂～細砂 | d. 灰黃褐 細砂 |
| 5. 純灰褐色 極細砂～中砂 小礫～中礫多量の雜層 | |
| 6. 4層と同質 | |
| 7. 5層と同質 | |

確認調査土層図



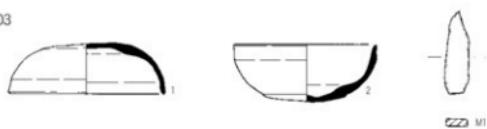
調査区平面図

図版4

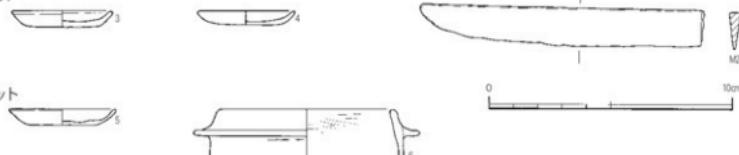


遺構図

SK03

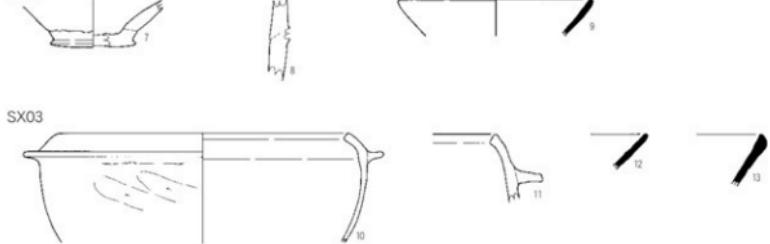


SK01



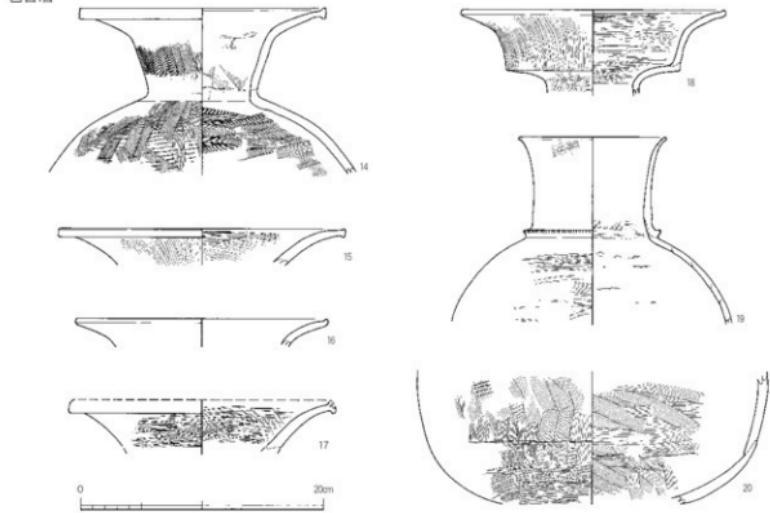
ピット

SD03

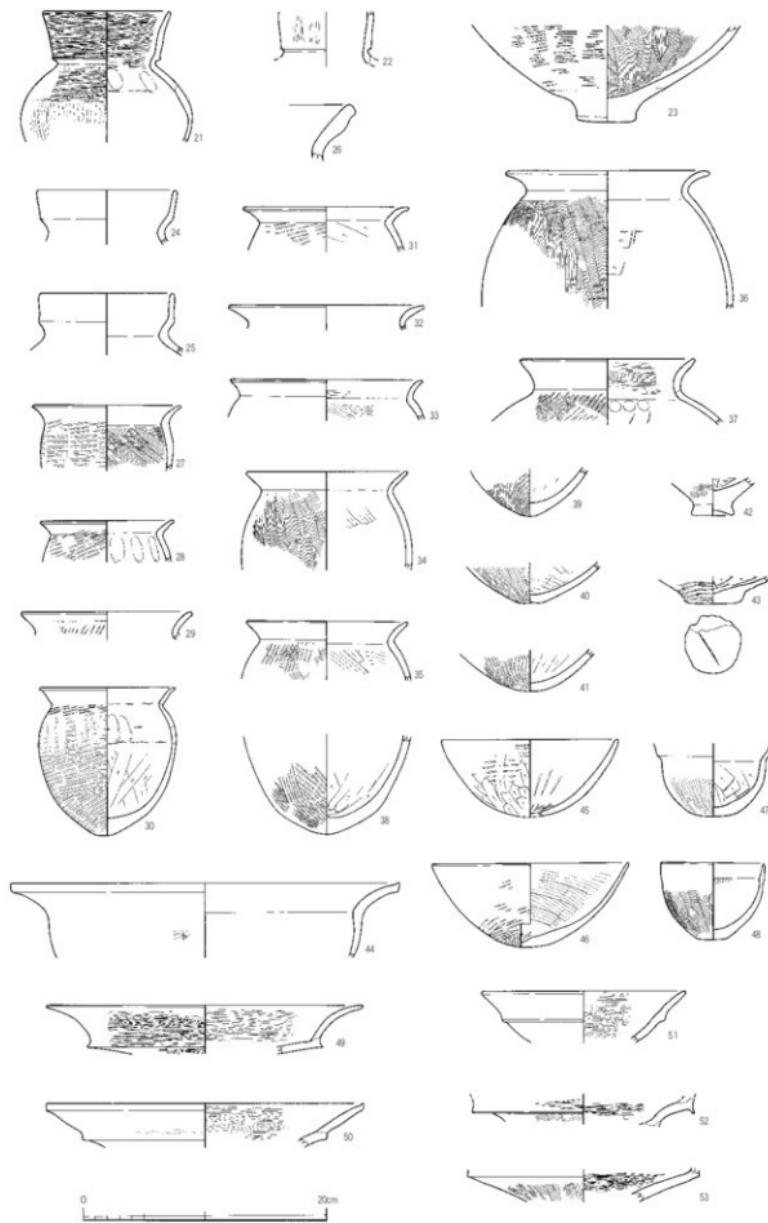


SX03

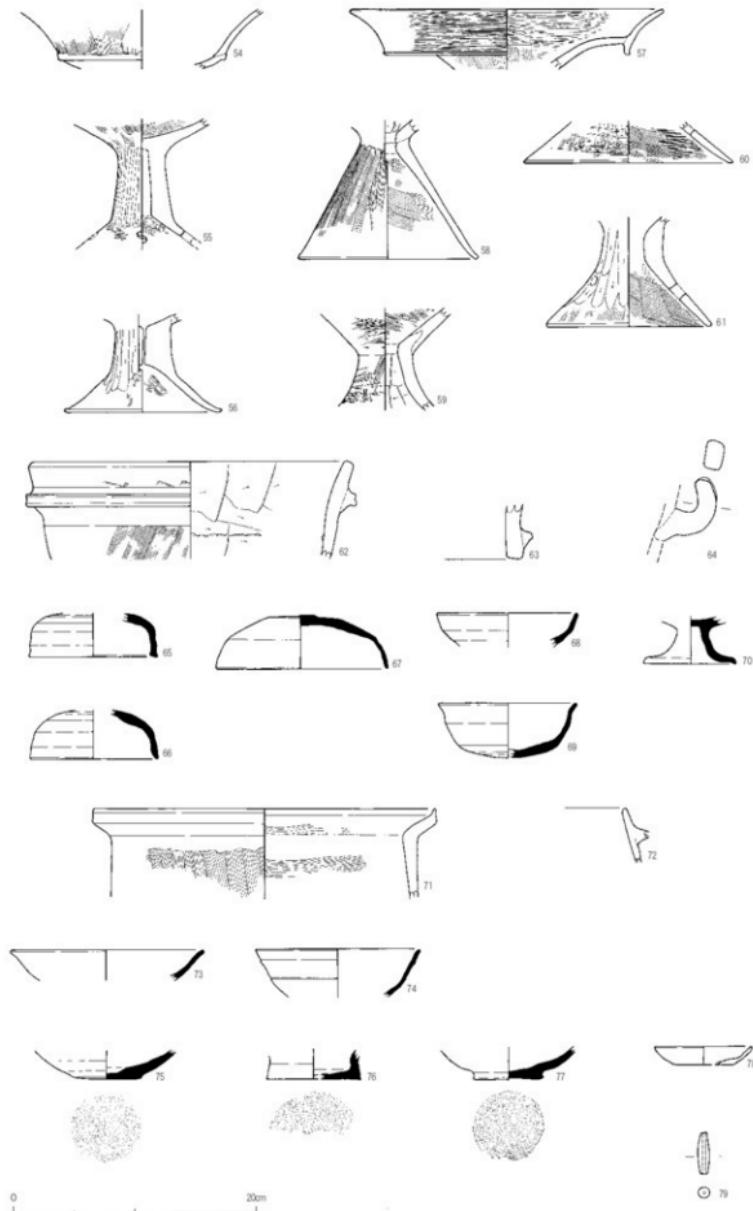
包含層



図版6



遺物 2



写 真 図 版



遺跡遠景（東から）



遺跡遠景（南から）

写真図版2



空中写真（国土地理院撮影）



調査地遠景



2 レンチ西壁



3 レンチ西壁



3 レンチ西壁



4 レンチ西壁

写真図版4



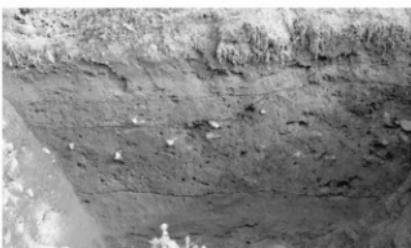
6トレンチ西壁



7トレンチ東壁



8トレンチ北壁



8トレンチ東壁 (SK02 断面)



7トレンチ拡張全景検出状況（北から）



7トレンチ全景（北から）

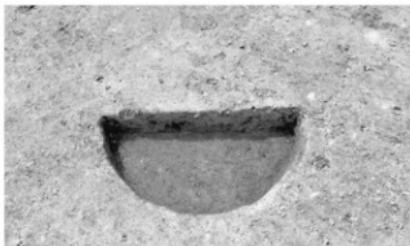


調査区全景（北から）

写真図版6



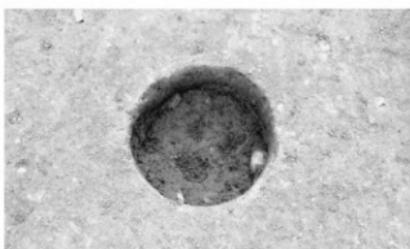
SK03 断面



SK04 断面



SK03 出土状態（東から）



SK04 全景（北から）



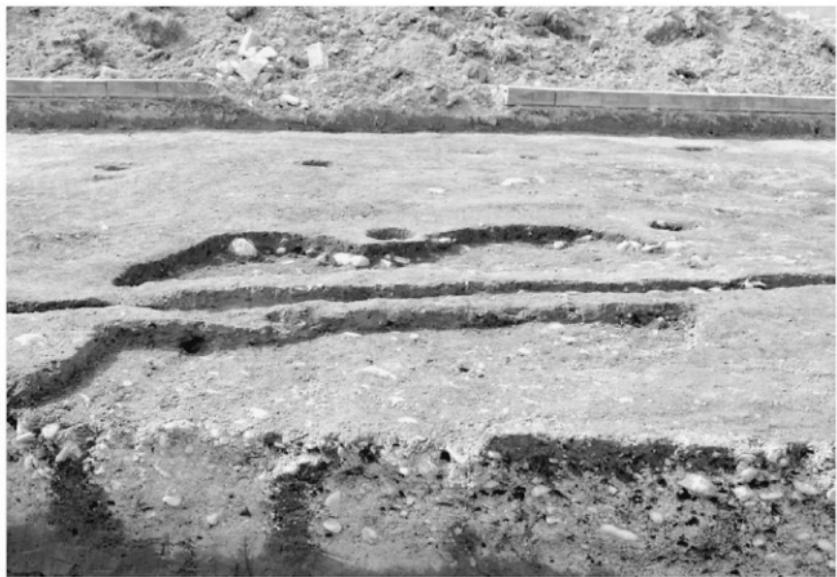
SK03 全景（北から）



SD03 堆積状況（東から）



SD03 全景（東から）



SX01 (東から)



SB02 (東から)

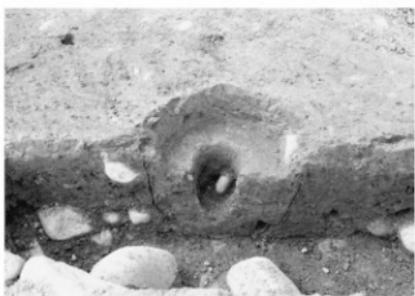
写真図版 8



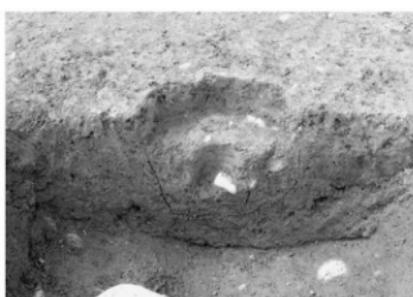
SB02 (北から)



P6断ち割り (北から)



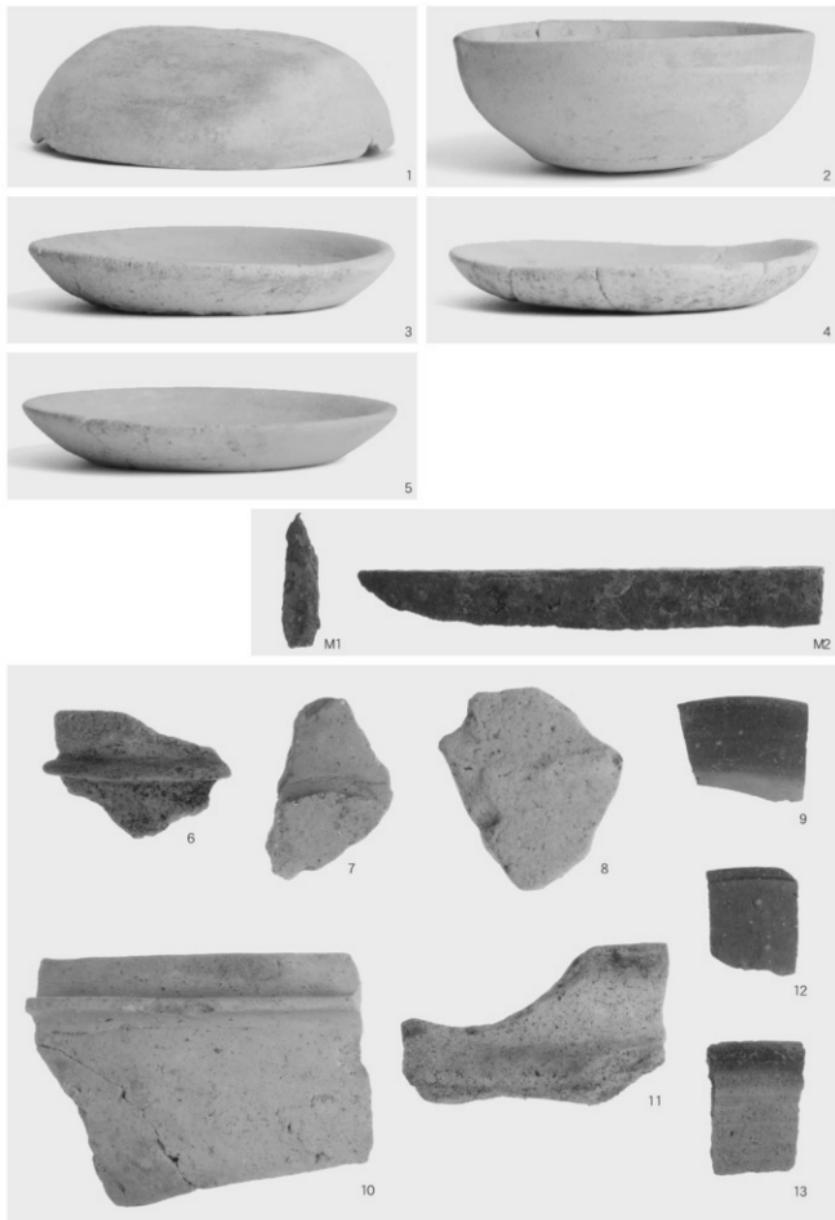
P8断ち割り (北から)



P7断ち割り (北から)

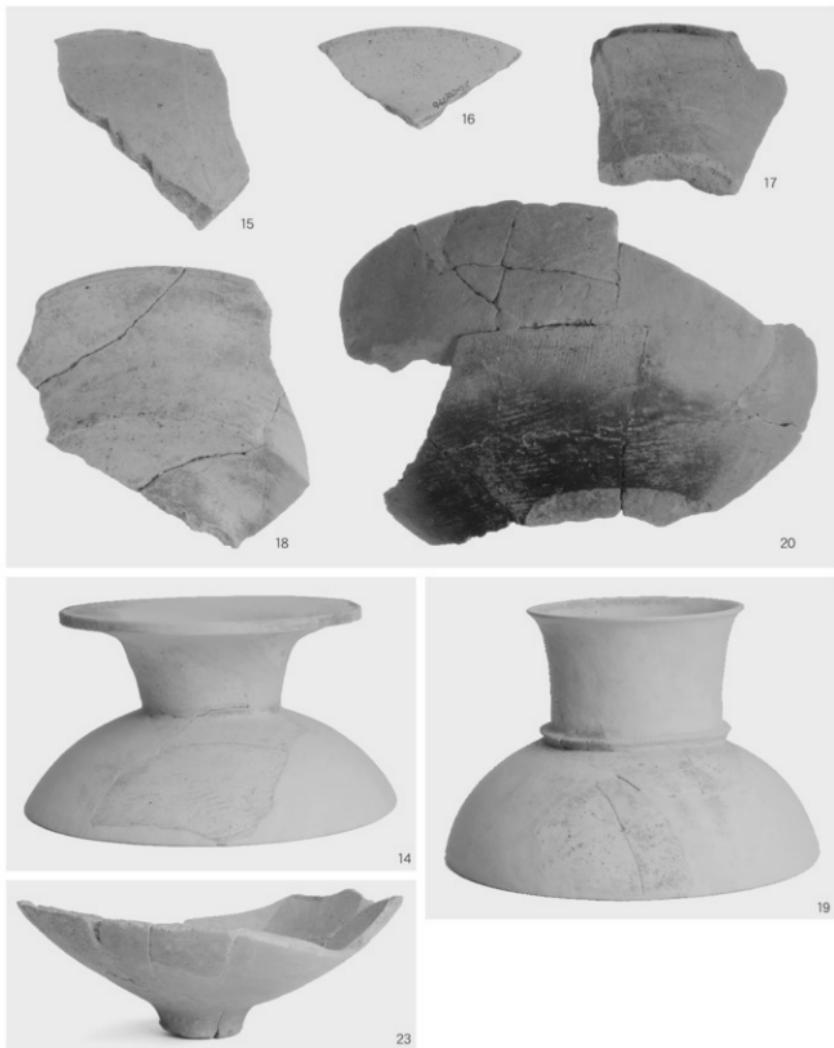


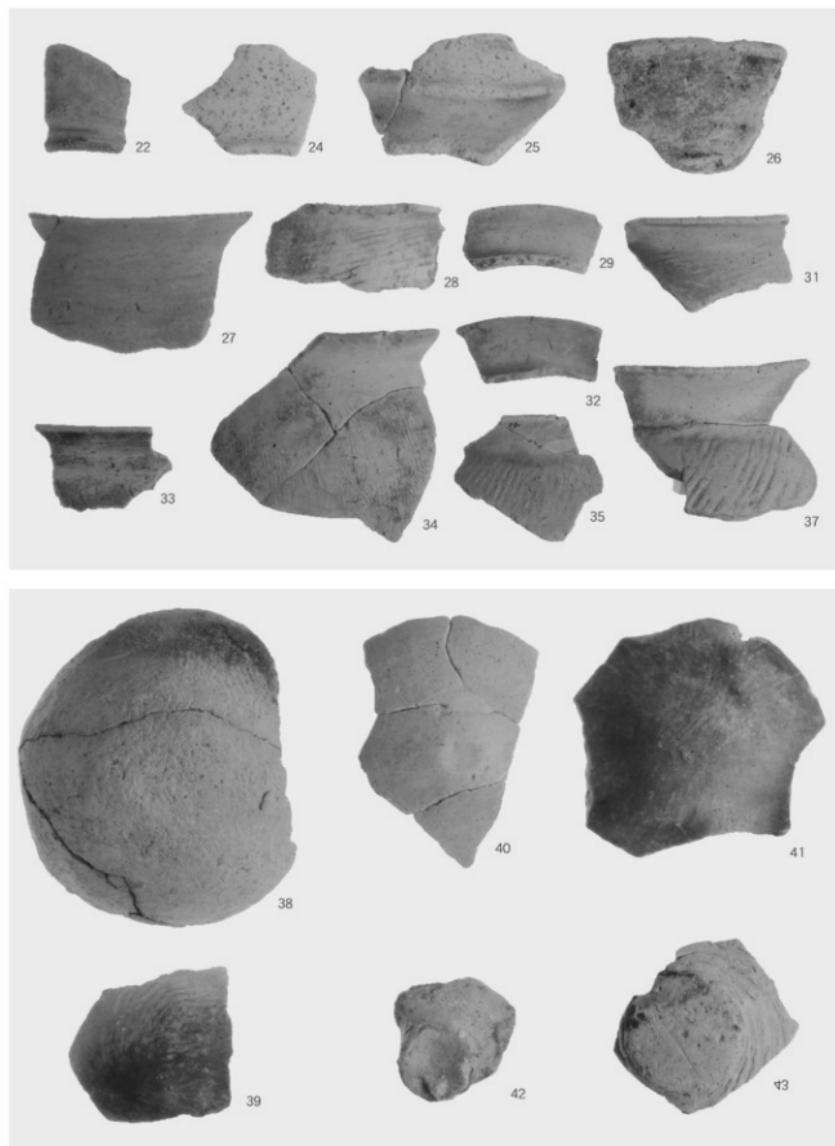
P10断ち割り (北から)



遺物 1

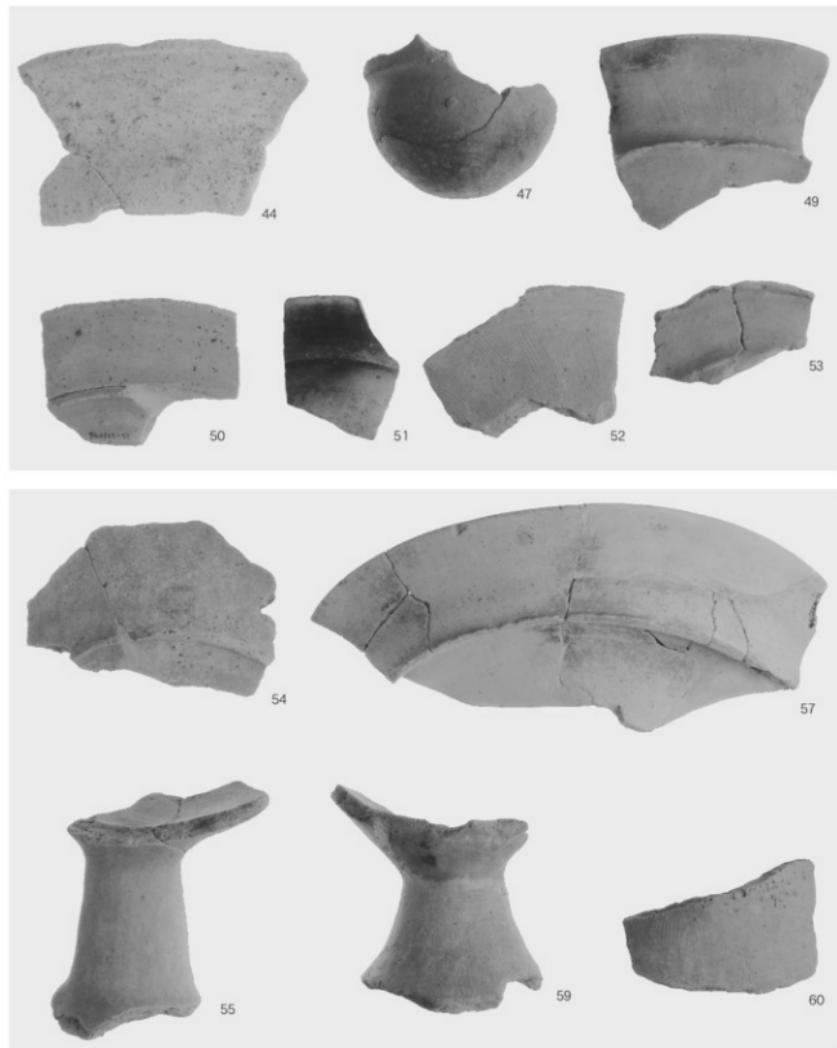
写真図版 10





遺物3

写真図版 12



遺物 4



30



45



36



56



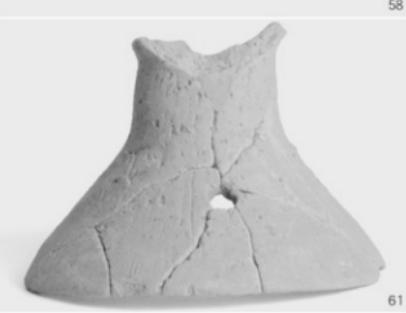
46



58



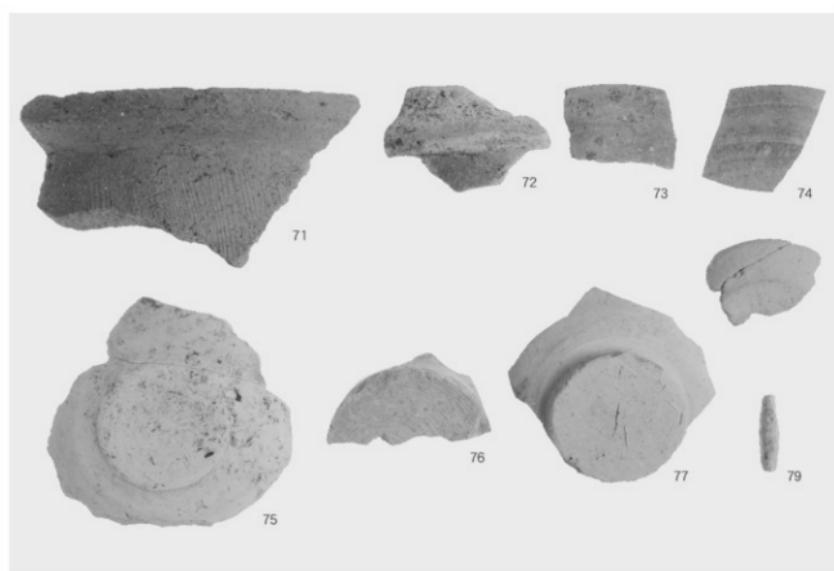
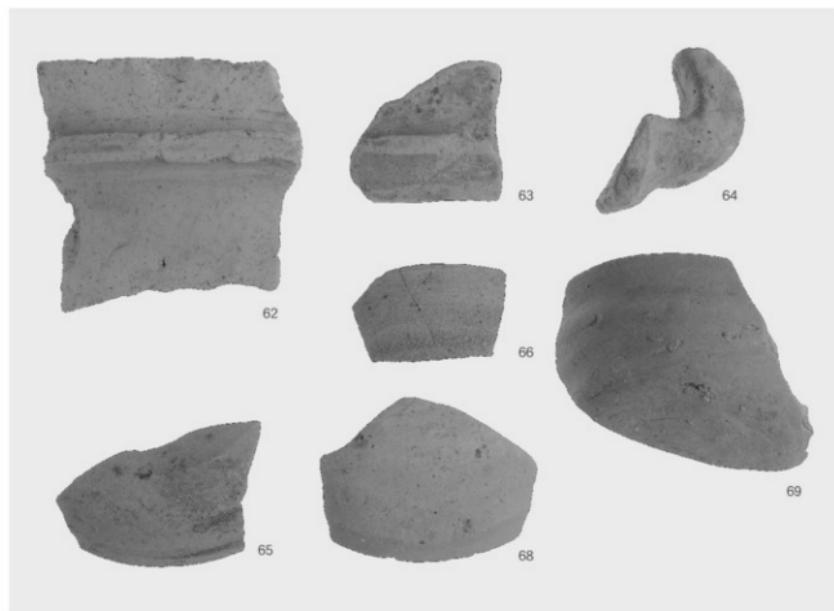
48



61

遺物 5

写真図版 14



遺物6



67



70



遺物 7

報 告 書 抄 錄

兵庫県文化財調査報告 第444冊

姫路市

高町遺跡

- 二級河川恒屋川河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -

平成25（2013）年3月28日 発行

編集：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

〒 675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号

（兵庫県立考古博物館内）

発行：兵庫県教育委員会

〒 650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷：株式会社 ソーエイ

〒 673-0898 兵庫県明石市樽屋町6-6
